

東北学院大学南津島民俗調査プロジェクト報告書

1. はじめに

本稿では、本年度の東北学院大学南津島民俗調査プロジェクトの成果と、次年度に向けての課題とを記述してゆく。

本稿の構成は以下の通りである。①活動の主旨、②今年度の活動と成果、③次年度に向けての活動である。なお、①についてのみ、これまでの活動報告書との重複が見られる。というのも、このプロジェクトは継続性が求められるもので、主旨を大きく変更していないからである。

1-1. メンバーと私たちの強み

1、2年目と同様になるが、私たちは宮城県仙台市に所在する、東北学院大学に所属する学生団体である。私たちには、次の2つの強みがある。

1つ目は、専門性を活かした貢献ができることである。プロジェクトのメンバーは文学部歴史学科の学生たちであり、とくにコア・メンバーは専門分野として地域文化を研究対象とする民俗学を学んでいる。地域文化についての高い専門性を持つからこそ、地域の人びとが大切にしてくられた地域文化についての深い理解が可能になり、そのことをふまえた地域の復興を展望できると考える。

2つ目は、長期の貢献が可能になることである。メンバーは東北各地の出身者が多数を占める。また福島県出身者も少なくない。私たちの多くが東北各地での就職を希望している。そのため、地域との交流が学生時代に完結してしまうのではなく、将来的にも交流を続けていくなど、長期にわたる調査・交流活動が可能であると考えている。

このような強みを活かして、福島県でもとりわけ東日本大震災で被災した地域の「集落復興支援事業」に取り組もうと考え、本事業に応募し、一昨年度よりこの活動に取り組んでいる。

1-2. 南津島地区との出会いと活動の狙い

本事業を通じて、双葉郡浪江町南津島地区のみなさんとの交流活動を実施することとなった。南津島は現在もなお、帰還困難区域に指定されている。そのため、かつて地区から避難した人びとは、集落を離れバラバラに住まうことを余儀なくされている。ここからかつてのような、土地に根ざした近隣関係にもとづく集落活動が困難である状況が理解できた。

また私たちは南津島にある優れた芸能について知った。それは県指定無形民俗文化財で

ある田植踊り／神楽七芸などである。現在も南津島郷土芸術保存会が優れた芸能を継承している。しかし避難先がバラバラになってしまったことにより、震災後も人びとの心の拠り所となっている民俗芸能でさえも、継続が困難な状況が現出している。

こうした状況を見聞きするにつけ、私たちの強みを活かした集落支援ができるのではないかなと思うようになった。すなわち、地域文化をサポートする活動を通して、地域をエンパワメントできるのではないかなということだ。そのためにまず地域を調査し、現在まで育まれてきた歴史・伝統を担おうとする南津島郷土芸術保存会への支援活動を行ない、ささやかながら、文化を受け継いでいく活動に協力したいと考えている。

住民の大部分が土地を離れて生活せざるを得ないため、いま津島地区の地域文化は、いわば「風前の灯火」となっているという。しかし、受け継がれてきた伝統の尊さ、重要性は変わらない。地域の住民の思いや考えをくみ取り、それらをつぎの世代にいかにつないでいくかを、郷土芸術保存会とともに考えていくことは、私たち民俗学を学ぶ歴史学科生の使命であると考えている。

また、私たちがサポーターとなることで、地域文化の認知度を高める効果も期待している。眠っている地域文化を復興させ、周知させることでまた次世代の担い手の発掘をすることができるのではないかな。連綿と受け渡されてきたものを、また私たちが支援し、その先に届ける。その仕事に誇りと責任をもって取り組んでみたい。

2. 今年度の活動内容

以上のような状況をふまえて、今年度も民俗芸能の継承を軸に活動を行った。これは1、2年目の活動の時点で、保存会メンバーのみで田植踊りを披露することが困難になりつつあることが確認できたためである。私たちがサポートできる体制を構築してゆくことで、民俗芸能の継承のみならず、集落の持続にも貢献できると判断した。

また、今年度は芸能の継承支援のほかに、「伝える・広げる」活動にも取り組んだ。具体的には東北学院大学博物館における企画展示及びガイドブックの作成である。これらによって、南津島という地域や田植踊りという民俗芸能を知らない方にも知ってもらえる／楽しんでもらえる機会を創造できたのではないかなと考える。また、記録という意味でも長く活用していきたいと考えている。

2－1. 主な活動内容一覧

1年目である2022年度は新型コロナウイルスの影響により保存会自体の活動頻度が低下していたが、2年目である2023年度にはコロナによる規制の緩和や3月31日に津島地区の帰還困難区域が一部解除されたことにより、保存会にイベント出演の依頼が殺到した。そ

れに伴い学生側の活動も活性化し、田植踊りだけではなく、神楽・岡崎という演目の継承支援も始まった。

3年目である今年度も、一部解除された津島地区をはじめ、福島県内の様々なイベントに保存会の方と共に出演させていただいた。また、田植踊りのみならず新たに神楽・岡崎についても披露することができた。

以上を踏まえて、今年の主な活動を整理し、表1のようにまとめた。

表1：今年度の活動概要

年月日	会場	参加者	主な活動内容
2024年8月17日(土)	つしま活性化センター	学生3名	「つしま夏まつり」にて祭り、盆踊りのサポート
2024年8月31日(土)～9月2日(月)	・つしま活性化センター ・大堀防災センター	学生21名	・保存会の方々との交流会、及び芸能の合同練習会 ・道具、衣類の贈呈式
2024年10月6日(日)	二本松岳下住民センター	学生10名	「ふるさとの祭り」、「つしま肉まつり」に向けた保存会の方々との合同練習会
2024年10月12日(土)	ビッグパレットふくしま	学生14名	「ふるさとの祭り」にて保存会の方々とともに田植踊りの披露、及びサポート
2024年10月13日(日)	つしま活性化センター	学生17名	「つしま肉まつり」にて保存会の方々とともに田植踊り、神楽の披露、及びサポート
2024年11月24日(日)	浪江町地域スポーツセンター	学生8名	「復興なみえ十日市」にて保存会の方々とともに神楽の披露、及びサポート
2024年12月27日(金)～2025年6月30日(予定)	東北学院大学博物館		・東北学院大学博物館にて企画展示「南津島の田植踊展～未来へつなぐバトン～」の開催 ・博物館内にて「南津島の田植踊を1000倍楽しむガイドブック」の配布
2025年2月15日(土)～16日(日)	響きの宿(須賀川市)	学生27名	・成果報告会・発表会 卒業生を中心とした学生のみ

			で田植踊り、神楽の披露 ・保存会の方々との懇親会
2025 年 3 月 14 日（金）	祭屋湯左衛門	学生 10 名	・保存会の方々との合同練習会 ・卒業生を除いた、新メンバーでの練習会を予定
2025 年 3 月 15 日（土）	バルセいいざか	学生 10 名	・「原発のない福島を！県民大集会」のオープニングで田植踊りを披露する予定

2－2. 具体的な活動内容

〈夏合宿〉

夏合宿は 2024 年 8 月 31 日～9 月 2 日の 3 日間にわたり、津島の活性化センター及び大堀防災センターにて行われた。31 日、1 日の合同練習会では、学生は保存会の方々に田植踊り及び神楽・岡崎を教えていただきながら練習に励んだ。2 日の最終日には、前日までの 2 日間の合同練習会で保存会の方に頂いたアドバイスを学生同士で共有し、各々が踊りを磨き上げていた。

また、初日であった 31 日には芸能で使用する着物や道具の贈呈式も行われた。「民俗芸能を継承するふくしまの会」様からは着物を、「南津島郷土芸術保存会」様からは神楽の獅子頭や面などを寄贈していただいた。これまでの練習やイベントでは、保存会の方から着物や道具をお借りしていた。しかし、今回寄贈していただいたことにより練習の幅が大きく広げることができた。着物を寄付してくださった方々や保存会の方々など、さまざまな人の思いを胸に、これからも活動に取り組んでいきたい。



写真 1：田植踊りの練習風景



写真 2：神楽の練習風景



写真3：贈呈された着物と学生、保存会の方々

〈ふるさとの祭り〉

〈肉まつり〉



写真4：ふるさとの祭り



写真5：肉祭り

私たちの活動にとって重要な、保存会の公演をサポートする事業がある。今年度は、「ふるさとの祭り」「肉祭り」への出演に協力した。また3月15日の公演にも協力する予定である。

「ふるさとの祭り」は、田植踊での出演となり、太夫1名・笛2名・種下ろし1名・太鼓1名・早乙女3名・ささら2名の10名がステージに上がった。

また、「肉祭り」は、神楽・田植踊と2つの演目での出演となった。神楽では、前被り1名・後被り1名・笛1名の3名が出演した。田植踊では、太夫1名・笛1名・鉦頭1名・ささら2名・種下ろし1名・太鼓2名・早乙女3名の計11名が出演した。

移動を伴う、連日の公演であったため、普段の出演よりも学生たちが多く舞手となって、サポート

することができた。

ひとつの公演を成功させるには、着付けや道具運び・受け渡しなどを行なう裏方となるメンバーも必要になる。両公演でもサポートにまわる学生たちの献身的な協力もあった。

〈博物館展示〉

大学博物館にて、南津島の田植踊に関する博物館展示を実施した。これは本プロジェクトの成果発信という意味が込められている。2018年にやっとのことで再開された民俗芸能の継承を、歴史学科の学生たちが協力・支援してきた。学生たちは芸能を身体化するだけでなく、東北を代表する民俗芸能である田植踊そのものへの理解を深め、また、この特色についての理解を深めてきた。

そこで、博物館展示を通して、①東北を代表する民俗芸能である田植踊への認知を広げるとともに、②被災地の現状を共有し、さらには③学生たちの実践を周知する機会を設けることとした。



〈広報活動〉

博物館展示と合わせて、「南津島の田植踊を 1000 倍楽しむガイドブック」を作成した。民俗芸能を初めてみる人にもより深く田植踊を楽しんで欲しいと感じたからである。本来地域のなかで伝承されてきた芸能であるため、その土地を離れて演じると、初見である観客の人びとは、芸能の意味や文脈を理解することが難しい。そこで、より楽しんでいただける仕掛けが必要であると感じガイドブックを作成した。

また、南津島を含めた「津島の田植踊」について、より深く理解する必要性を痛感し、過

去の民俗調査について精査をした。具体的には、昭和 30 年代に津島の民俗芸能調査を実施した山口弥一郎先生の調査ノートの翻刻を実施した。これは「調査記録からみた福島県浪江町津島の民俗芸能(一)―山口弥一郎による一九六〇年前後の調査記録を対象に」として、『歴史と文化』に掲載予定である。



〈成果報告会〉

本事業に採択される前年の 2021 年を助走期間とし、22 年から本格的にスタートしたこのプロジェクトの中心を担ってきた学生たちが、いよいよ卒業を迎える。そこで、これまでの成果報告会を南津島郷土芸術保存会と共同で実施した。

この報告会には、2つの意味が込められていた。ひとつは、これまで習い覚えた芸能を保存会のみなさまの前で演じ、卒業を記念した会とすること。もうひとつは、津島で行なわれていた際には個人宅で演じられてきた芸能を、本来のカタチに近い状況で演じることである。「響きの宿」にご協力いただき、1軒家で演じる機会を設けることができた。

総勢で 60 名近い人びとが集い、本プロジェクトの成果を、学生側・保存会と相互に報告することができたことは、この上ない喜びであった。この会に立ち会った人の声を、ひとつ紹介しておきたい。「学生たちがかかかわると聞いて、正直不安な部分もあった。すぐ終わってしまうのではないかと。しかし、活動が始まってみると、保存会のみなさまの顔がやわらかくなっていった。どんどん若返っていったのが印象的であった」。

このような評価を得られたことに甘んじることなく、主力となってくれたメンバーたちが卒業した後も、新たなかたちで活動を継続してゆきたい。



写真 8：田植踊



写真 9：神楽

3. 次年度へ向けて

4 年目となる次年度は大きく分けて 3 つの活動を行っていききたい。1 つ目は民俗芸能の継承支援活動の継続である。これまで田植踊り、神楽の習得に力を入れてきた。しかしながら、軸となり継承活動を行ってきた 4 年生が今年度で卒業する。このため、まず学内における継承にしっかりと取り組み、継続的に練習を重ねることでさらなる支援活動を発展させていきたいと考える。

2つ目は南津島地区を中心とした津島地区の交流会の実施である。なかなか実現が困難であるが、保存会の枠を超えて津島地区のみなさまとの交流の機会を実施出来たらと考えている。

3つ目は民俗学者・山口弥一郎先生と関連したイベントの実施である。いまから半世紀年以上前の貴重な記録に接することができた。これらの内容について公表されることになるが、この成果を活用した企画を実施したいと考えている。



写真 10：記念品とともに



写真 11：専次郎会長からご挨拶